

## 二〇二四年度入学試験問題

## 国語 (六〇分)

## 注意事項

- 一、試験開始の合図があるまで、問題冊子は開かないでください。
- 二、この問題冊子は25ページあります。試験中、ページの脱落等に気づいた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
- 三、解答用紙(マークシート)の汚れなどに気づいた場合も、同様に知らせてください。
- 四、解答用紙(マークシート)は折り曲げたり、汚したりしないでください。
- 四、解答は、すべて解答用紙(マークシート)に記入し、解答用紙(マークシート)の枠外には、なにも書かないでください。
- 五、解答番号は、1～40まであります。  
解答用紙(マークシート)には、問題番号が1～50、選択肢が①～⑩まで印刷されていますが、解答にあたっては、各設問に指示された選択肢の数の中から選んで解答してください。
- 六、マークは必ずHBの黒鉛筆を使用し、訂正する場合は、完全に消してからマークしてください。
- 七、監督者の指示に従って、解答用紙(マークシート)に解答する科目・受験番号をマークするとともに、受験番号および氏名を記入してください。
- 八、解答する科目、受験番号、解答が正しくマークされていない場合は、採点できないことがあります。
- 九、試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。

## 問題一 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

ある日、辞典編集部宛に一通の封書が届きました。差出人は青森県の中学校の先生。先生は『岩波国語辞典』を信頼できる辞典として長年愛用され、生徒にも勧め続けてきたこととのことです。ところが、「偶然、「くんだり」という項目を見たとき、何とも名状しがたい思いにとらわれた」とおっしゃるのです。そこには「青森くんだりまで来た」という用例が掲げられてありました。

「当地はたしかに「くんだり」と付けて呼ばれるのにふさわしい土地であろうかと存じます。しかし、もし教室の生徒の誰かがこの記述を目にしたならば、その者はどんな思いをしようと思像すると、胸が痛むのです」とありました。編集部の皆が胸のふさがる思いにとらわれました。「こんな無神経な用例を掲げてけしからん。即刻訂正しろ」というお叱りでもないことが、いつそうこたえたのです。

どのような用例が適切であったのか、その場で議論が始まりました。ひとしきり話し合ったところで到りついた結論らしきものは、どのように書き換えても、それが具体的な地名である限り、その地の人を傷つけずにはおかないだろう、ということでした。いつそのこと、東京とか大阪とかの大会や銀座のような繁華街を挙げたらどうだという者もありましたが、それはそのことばがわかっていないことの現れに他なりません。

「くんだり」はどんな地名に付けてもよいのではない、中心から「下って行った」土地というのが意味のチュウカク<sup>b</sup>です。今風に言えば、「上から目線」のことばです。中心と思われている地名に「くんだり」を使うことはできません。「お前に会いにわざわざこんな〇くんだりまで来たんだ」「〇〇くんだりとはご挨拶だな」といった会話の例文にして、いくらかでも発話者の態度とそれを批判する視線を込める工夫というのも提案されたのですが、このことばがやりとりされる場面がうまく表現できているかどうか。「ご挨拶」の表す内容をとらえるのもちょっと難しいのではないか。また別の、古典の例を挙げておくという案も、現代語辞典としてどうかと、見送られました。

結局、これが良いと誰もが賛成できる用例はいまも見付かっていません。これこそと思う例を考え付くまでは用例を掲げず、「そこが僻地・場末だという意識から、その地を見下しあなどる気持ちで言う」ことが分かるような解説とすることで、このことばのニュアンスを示そうとしています。もしこの語を使うのであれば、そうしたことを承知で使ってほしいというものです。

用例の不適切さが正面から問題とされることは、意味解説や表記についての批判ほど多くはありませんが、編集部が深刻に自省すべきケースとなることがしばしばあります。意味の記述には、シッピツ<sup>d</sup>者はもちろん編集・校正陣も自覚的に緊張して向かい合います。

しかし、用例の場合は、その語の使用法としてかなっているかどうかを十分に吟味することはもちろんですが、ともするとその例文が表現している内容への考慮がおろそかになる面があります。その無自覚・無意識の中にスタッフの意識が如実に反映され、我ながらドキッとしてしまうことがあるのです。その具体的な現れの一つは女性蔑視です。

女性蔑視は現在も世の中に存在し、言語のさまざまな面に現れ出てきます。日本語が総体として少なからぬ女性蔑視の表現を持っていることは、事実です。ことばの世界でも男女は対称ではなく、最も分かりやすい語彙のレベルで見れば、例えば「女だてら」「男まさり」という語はあっても「男だてら」はなく、「女まさり」もまず聞きません。どちらの語も女一般の能力をあなどったところからできたことばです。

あからさまな蔑視はおくとしても、現代では男女間で区別する意味や必要のない物事、あるいは男女の差で決め付ける合理的な根拠のない事柄にも、言語という文化の歴史性が及んでいると言わねばなりません。

ご承知のように、英語では“man”が普通に「人」を表すことばとして使われますが、役割や職業を表す多くの複合語についても、それが特に男に限った仕事でないにもかかわらず、“man”という語で表されました。“chairman（議長）”“anchorman（ニュース番組などの総合司会者）”“fireman（消防士）”などがその例ですが、近年では“man”を取って単に“chair”“anchor”と言ったり、“chairperson”“anchorperson”“anchorpeople”のように呼んだり、“fire-fighter”というような工夫をして、Aと無関係な言い表し方が広く行われるようになっていきます。日本でも例えば「看護婦」という呼び方は減って、男女とも「看護師」と言うことが普通になってきています。

個々の語の意味を解説する場面であれば、そのことばにひそむ社会的な偏向やそのよってきたる所以を説くこともできます。しかし、前に書きましたように、用例を掲げる段になると、とたんに自分でも気付かずにいたゆがみを露骨に表してしまうことがよくあるので、アメリカのある辞典は、例文の中に現れる男性主語と女性主語の比率を均等にし、同時に、例えば「賢い」「のろまだ」「弱い」「勇敢だ」「キンベンだ」「潔い」「だらしない」「忍耐強い」などといった人の評価に結び付くことばの用例に「彼」と「彼女」とでプラス価値・マイナス価値の偏りが無いよう気を配ったということです。そのことが、社会でのそのことばの使われ方を反映する上で適切な用例になるかどうか、必ずしも問題がないわけではないでしょう。端的に言って、辞典に女性蔑視の見方が表れているのは、辞典編集のスタッフ一人一人の女性観の問題である以前に、そもそも現在の日本語の女性への視線です。

辞典は社会の意識を忠実に反映するものたるべしとして、よく見られる用例をそのまま掲げることが求められているのか、あるいは、そうした社会的な傾向・風潮に対して、それをよしとしない態度をとるか、辞典編集者はその判断を迫られています。先のアメリカ

力の辞典は編集方針として、現代において根拠のない女性蔑視を遠ざける態度を選んだのでした。

国語辞典が含んでいる「女性蔑視」がおしなべて批判にさらされたことがあります。それは現在も解決済みになったわけではありません。『岩波国語辞典』は、第二版で「卒業」という語に比喩的な用法を書き加えました。「ある程度や段階を通りこして離れることも使う」というものですが、その時の例文は「女遊びはもう卒業した」でした。この例文について、『岩波国語』の編集スタッフに女性はいないのかで始まる厳しい批判が寄せられました。指摘を受けるまで気付かずでした。私などは、「うむ、いかにもその場面が浮かんでくる、ぴったりした用例だ」くらいに思っていたのでした。職場に、進歩的な考えの持ち主なのに、こと女性に対しては旧弊な態度を見せがちな年配の男性がいたのですが、そのおじさんでさえがことばを失いました。この例文は第四版で差し替えましたが、社会そのものであることばに対して辞典がどのような態度をとるべきか、私はいまだに迷っています。

辞典の職場にももちろん女性スタッフがいます。年配の人も若い人もいます。若い女性の編集者に、「男」「女」という言い方が嫌で、辞典の解説の中でも「男性」「女性」と書き換えたいと主張する人がいました。確かに近年の新聞記事を見ても、あからさまな「男」「女」は少なく、不審者や犯罪容疑者を別とすれば、大方は「男性」「女性」です。生々しさを避ける一種の **B** なのだろうと思います。基本的な方向として良いだろうということで、その編集者の提案は『広辞苑』で採用され、すべての解説を対象として、「男」「女」を検討し書き換える作業が行われました。併せて「婦人」ということも検討されることになりました。

もちろんこれらは検討するのであって、すべてを例外なく書き換えてよいというものではありません。つい最近、『広辞苑』で「歩障」という項目を引く機会がありました。これは「女性が外出の時にかざして身をかくし、……」というものですが、ちよつと違和感を覚えました。「女性」の前に「身分ある」か「しかるべき」か、何か形容句が必要なところではないかと感じたのです。旧版を見ると、今「女性」とあるところが「婦人」となっていました。「女性」と「婦人」とが等しいわけではないところが問題です。

(増井元『辞書の仕事』による)

(注) 歩障……竹や木の枠に布を張りめぐらした移動用の囲い。女性が外出時に身をかくすときなどに用いた。

問一

傍線部 a 「胸のふさがる思い」とあるが、この思いを端的に表した語句はどれか。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 。

- 1 忸怩たる思い
- 2 感謝の念
- 3 憐憫の情
- 4 自負心

問二

傍線部 b ・ d ・ g と同じ漢字を含むものはどれか。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものをそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。解答番号は   。

b 「チユウカク」

- 1 裏でこそこそとカクサクする。
- 2 引退をカクゴする。
- 3 問題のカクシンを突く。
- 4 カクシンの技術。

d 「シツピツ」

- 1 彼女にシツトする。
- 2 今日の手術のシツトウ医。
- 3 ひどいシツタイを演じる。
- 4 生活習慣が原因のシツカン。

g 「キンベン」

- 1 三年間カイキンした生徒。
- 2 新商品の情報がカイキンされる。
- 3 キンサで勝利する。
- 4 キンセンに触れる。

問三 傍線部 c 「ご挨拶」の表す内容」とあるが、それはどのようなことか。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は [ 5 ]。

- 1 相手の自虐的な発言に対するからかい
- 2 相手の礼を欠いたことばに対する皮肉
- 3 相手の不機嫌な態度に対する叱責
- 4 相手の義理堅い行動に対する謙遜

問四 傍線部 e 「ことばの世界でも男女は対称ではなく」とあるが、それはどのようなことか。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は [ 6 ]。

- 1 日本語には男性特有のことばもあれば女性特有のことばもあり、男女で使うことばが異なるということ。
- 2 現実社会と同じく、日本語の中で男女は同等に扱われておらず、女性を蔑む表現が少なからずあるということ。
- 3 日本の社会は女性に対する差別的傾向が顕著に現れており、ことばの世界でも同じように差別的だということ。
- 4 日本語は女性を軽視することばを持っているが、ことばは必ずしも現実を反映していないということ。

問五 傍線部 f 「言語という文化の歴史性が及んでいる」とあるが、それはどのようなことか。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は [ 7 ]。

- 1 明確な理由がないにもかかわらず、言語の上でも文化の上でも男女で扱いに差がつけられている物事について、その背景を理解するには日本語という言語が発生した歴史を理解する必要があるということ。
- 2 日本語という言語は長い間男性中心に使われてきたため、男性優位・女性蔑視の傾向があり、そのような言語の特性によって、合理的な根拠がないと思われる事柄でも男女で区別し、差をつけているということ。
- 3 文化は言語によって伝承されるものであり、日本の文化の歴史は日本語という言語の歴史でもあるので、現代では男女間で区別する必要がないと思われるものにも、区別されるに至る歴史的な根拠や意味があるということ。
- 4 日本語という文化の中で、男女間で区別することばを用いて表してきた事柄について、長い間そのようなことばを使ってきたことが影響して必要性や根拠のないままに男女差をつけて扱ってしまっているということ。

問六 空欄

A

に入る語句はなにか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 8。

- 1 性
- 2 国
- 3 職業
- 4 時代

問七

傍線部 h 「必ずしも問題がないわけではないでしょう」とあるが、筆者がそのように考えるのはなぜか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 9。

- 1 辞典上で男性主語と女性主語の比率を均等にし、男女の評価に偏りがないようにしても、それが支持されることは限らないから。
- 2 例文の中で主語の男女比率を均等にすることは、男女を対等に扱うべきだという特定の態度を表明することにつながるから。
- 3 意図的に例文の主語の男女比率を均等にしたために、それらのことばが使われている実態と差が生じている可能性があるから。
- 4 辞典上で男性主語と女性主語の比率を均等にしたところで、現実社会の男女の評価の偏りを解決できるわけではないから。

問八

傍線部 i 「辞典編集者はその判断を迫られています」とあるが、「辞典編集者」はどのような「判断を迫られて」いるのか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 10。

- 1 辞典を編集する上で、女性蔑視などの社会問題について、さまざまな立場の意見を取り入れるか、自社独自の価値観に従うかという判断。
- 2 女性蔑視という社会的な傾向・風潮に対して、それらを黙認する立場で辞典を作るか、容認しない立場で辞典を作るかという判断。
- 3 辞典はこれまで通り社会の実態を反映するものだと捉えるか、その古い価値観から脱却した新しい辞典像を追求するかという判断。
- 4 辞典は社会の意識を反映するものとして差別的な現状をありのまま表現するか、倫理的な配慮の上で差別的な表現を是正するかという判断。

問九 傍線部 j「そのおじさんでさえがことばを失いました」とあるが、それはなぜか。次の 1～4 のうちから最も適当なものを一つ

選びマークしなさい。解答番号は 11。

- 1 指摘されるまで「女遊びはもう卒業した」という例文の持つ女性蔑視の傾向に無自覚だったことに愕然がくぜんとしたから。
- 2 批判を受けるまで「女遊びはもう卒業した」という例文を削除していなかったことに気付かず、自分のミスに動揺したから。
- 3 「女遊びはもう卒業した」という用例が女性蔑視だと指摘され、時代遅れの価値観を持っていたことを猛省まうせいしたから。
- 4 「女遊びはもう卒業した」という用例ですら女性蔑視の表現だと批判を受けることに呆然ほうぜんとしたから。

問一〇 空欄 B に入る語句はなにか。次の 1～4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 12。

- 1 レトリック
- 2 トートロジー
- 3 婉曲表現えんきょく
- 4 比喩表現

問一一 傍線部 k「女性」と「婦人」とが等しいわけではないところが問題です」とあるが、筆者がこの部分で伝えたいのはどのようなことか。次の 1～4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 13。

- 1 時代の変遷にもなつて価値観は変わっていくので、辞典の表現もその時代に合うように変化させていくべきだが、世代によつて価値観が異なるため、使う人の年齢によつて語句の捉え方が違う場合があるということ。
- 2 時代とともに価値観は変わっていくので、辞典に載っている表現には現代ではあまり使われないものもあり、古い時代の価値観を反映した語句の意味をうまく伝えるためには工夫が必要な場合があるということ。
- 3 価値観の変化に合わせて辞典で使う語句を書き換える必要があるが、十分に検討せず似たような言葉に書き換えただけだと、編集者の意図から外れてまったく異なる意味になってしまう場合があるということ。
- 4 価値観の変化に合わせて辞典で使う語句を変化させていくことに反対はしないが、単純に語句を書き換えるだけでは語句の持つ微妙な意味の違いを反映できず、意味を適切に伝えられない場合があるということ。



## 問題二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

おそらく、年輩の方々のなかには、子どもや若者が家族のケアをするのは良いことだと考える人もいるだろう。家族が助け合って世話し合うのは当たり前という感覚もあるかと思う。確かに、子どもや若者が家族の世話をする話は、昔から存在していた。

A、「やまなしもぎ」という昔話では、病気の重いお母さんが「やまなしを食べたい」と切望して、三人の息子がその実を手に入れようと山奥に出かける。一九三三年に児童文学作家の新美南吉が書いた「ごんぎつね」でも、主人公の兵十が病気の母親のためにウナギをとろうとしていたエピソードが出てくる。また、昔は、子どもが年下の子の子守りをすることもめずらしくなかった。

B、かつての子どもたちと、今話題になっている「ヤングケアラー」と呼ばれる子どもたちとは、いったい何が違うのだろうか？

おそらく一番大きな違いと思われるのは、今日の日本では、多くの子どもが介護や家事やきょうだいの世話をするとは想定されていないことだ。これは、子どもの貧困の議論にも重なる論点である。

日本では、二〇一三年六月に「子どもの貧困対策の推進に関する法律」が成立し、その前後に子どもの貧困がメディアで盛んに取り上げられた。

たとえば、二〇一三年五月二五日に放送されたNHK『週刊ニュース深読み 六人に一人！ どうする？子どもの貧困』では、子どもの貧困の現状が説明された後で、六〇代の人々からの声として、「私は貧しく育ったことを一番誇りに思っているし、それは人間を鍛える基本になると考えている」「戦後のより厳しい貧しさを体験している世代から見れば、働く意欲があれば生活できる」などの意見も寄せられていると紹介された。それを受けて、スタジオでは、六〇代以上の人の子ども時代**a**の貧困経験と今日の子どもの貧困経験はまったく違うとの指摘が研究者や解説者からなされた。

その指摘の具体的な内容を見てみよう。六〇代以上の人々が子どもだった頃には、貧しい家庭は多くあり、ある種の連帯感が見られた。しかも、時代は経済的に成長していく時期で、今は貧しくてもがんばれば豊かになれると思うことができた。しかし、今日では貧しさを知らない人が多く、学校でもほとんどの人はそれを察することができない。そのため、貧しい子どもやその親たちは気づかれず、**b**コリツした状態になってしまいがち。

子どもたちが教育を受ける平均的な年数も、昔に比べてはるかに長くなった。かつては中卒で社会に出られた人も多かったが、今は五〇%以上が四年制大学に行く時代になっている。しかも、その教育費が非常に高い。高校無償化になっても、学用品や通学、修学旅

行などにかかる費用は高く、C、今日の子どもたちにとって、携帯端末などは友達との関係を築く上で欠かせないものになってしまっている。番組では、このような議論がなされた（NHK 二〇一三）。

比較的生活のレベルが上がった先進シヨコクで貧困が議論される際に用いられるのは、「d相対的貧困」という考え方である。「絶対的貧困」が、人間が生きるのに最低限の衣食住を満たせない生活水準を指すのに対し、「e相対的貧困」は、その社会の平均的な生活レベルよりも著しく低い層を指す。

確かに、発展途上国の栄養失調の子どもたちに比べれば、日本の貧しい家庭の子どもたちは、一日に一回以上は食事ができて、学校にも通え、靴も持っているかもしれない。それでも、経済的理由で修学旅行に行けなかったり、まわりの子が持っている学用品を揃えられなかったりする子どもには、その立場ならではの苦しさがある。このように、先進国では、その社会の平均に比べてどうかという視点から、子どもの貧困が議論されている。

同様のことが、今日のヤングケアラーについても当てはまるだろう。高度経済成長期には平均的な生活水準は上がり、父親が働いてお金を稼ぎ、母親が育児や家事を担い、子どもは将来に向けて勉強するのが、日本の平均的家族モデルとして機能した。それまで子どもは早くから家の内外で働くことを期待されたが、この時期から、子どもは守られながら自分の知識や経験を広げ将来に向けて力を蓄えていく存在とみなされるようになったのである。

もちろん、いつの時代にも階層差はあるが、それでも、今日の日本人の平均的な感覚として、子どもが家族のケアを担うことはあまり想定されていない。子どもは自分の勉強や友達つきあいや体験を広げることに関心を持って、自分の時間と力を使えるものとされている社会では、家族の事情でケアを担い、学校生活や人間関係が十分に維持できないことは、ヤングケアラーをカタミの狭い状況に置いている面もある。

さらに、考えたいのは、ケアを終えた子どもや若者が戻る場所である。今日、ケアを担っている子どもや若者は、同世代に比べて自分が「取り残されている」と感じやすい。今の若者たちは、就職する時にどう評価されるかを強く意識するようになってきている。仕事に活かせる能力を持っているかどうかは、まず、就職活動でリレキ書に書けるような学歴や職歴や資格を持っているかで審査される。その仕組みは、自分のことだけに集中して時間を使ってこれなかったヤングケアラーにとって不利に働いていると言えるだろう。ヤングケアラーが家族のケアに時間とエネルギーを費やしてきたことは、単に「生活」ととらえられてしまい、ヤングケアラーも同世代との比較のなかで自分に能力があるという自信を持ちにくくなっている。

しかし、約三〇年前からヤングケアラーの調査と支援を続けてきたイギリスでは、子どもや若者がケアの経験を通して得たプラスの

影響にも目が向けられている。年齢の割に高い生活能力を身に付けていること、マルチタスクをこなせること、聞き上手であること、忍耐強いこと、病気や障がいについての理解が深いこと、思いやりがあること……。これらは、多くのヤングケアラーに見られる特徴であり、仕事をしていく上でも大いに発揮できる長所である。

こうしたプラスの影響を評価し、いかにマイナスの影響を小さくできるのか、どうすればヤングケアラーが同世代と同じような機会や経験を得られるのか——そうした観点から、ヤングケアラーのサポートを考えていくことが望まれる。

( 中 略 )

人間的にも時間的にも余裕がなくなっている家庭がケアを引き受けざるを得ないのであれば、当然起こるのは、家族内のケアの分担である。これまでの日本では、介護者がことが論じられる時に「介護者」として注目されるのは、家族のなかで一番中心的に介護を担う「主介護者 (main care)」であった。しかし、在宅介護が推奨され、介護離職を防ごうとする動きも進められていくなかで、介護やケアを可能な限り家族メンバーで分担することも進んでいく。

男性も、以前よりは家事や介護や育児をするようになってきた。親の介護をする三〇〜六〇代の男性介護者二八人に聞き取りを行った平山亮は、その介護者の半数は結婚していたと述べ、「結婚している息子介護者と自身の息子介護者を分ける大きな違いは、その息子自身に必要な家事を誰がしているか、という点にある」と指摘している (平山 二〇一四)。

平山の調査では、妻のいる息子介護者は、親の食事や着替え、ニューヨクや排泄、移動などの日常生活動作の介助を家族のなかでも多くしているという意味では「主介護者」だったが、それでもたいていの場合、家事は彼らの妻が担っていた。同居介護の場合には、家族全員の衣類の洗濯と家の掃除と食事の用意・後片付けは妻がやっており、別居介護の場合でも、彼らが親の洗濯物を家に持ち帰って妻が洗濯したり、妻が家で作った料理を彼らが親のところに持って行ったりすることが多かった。親の介護から家事が分離されるといふ現象は、妻を介護する夫介護者やシングルの息子介護者には見られないものであったという。

他に分担する相手がいなければ、ケアは一人で担わざるを得ない。しかし、家で動ける人が複数いれば、現実的な方法として、しばしば分担という道がとられる。こうした家族内のケアの分担は、子どもにはどう作用するのだろうか。

未成年の子どもは、大人のように働いて稼いで経済面で家庭内のケアに貢献することはできない。そのため、家族のなかにケアとサポートを要する人がいて、家庭内の大人が疲弊してくると、子どもは家族を支えるためにも、放課後や夜間のケアに関わるようになる。要介護者のケアを要する度合いがさらに進んでケアの総量が増えてきても、子どもという立場では、その生活を大きく変える判断をすることは難しい。

「主介護者」を支える第二・第三のケアラーであることも多い子どもは、表には「D」として見えず、自らもそうした認識を持たないまま、睡眠不足や疲労を溜めていき、それが長期化すると、学校生活や進路にも影響を受けてしまうことがあるのである。

このように、社会や経済の変化、生活水準の向上、医療の発達などにより、日本人の平均的なライフコースや家族のあり方は大きく変わってきた。そのなかで、子どもが家庭内のケアの分担に組み込まれやすい状況は増えていると言えるだろう。

(澁谷智子『ヤングケアラー——介護を担う子ども・若者の現実』による)

問一 空欄 A ・ B ・ C に入る語句はなにか。次の1～10のうちから最も適当なものをそれぞれ一つずつ選び

マークしなさい。解答番号は 14 ～ 16。

- |         |        |       |        |        |
|---------|--------|-------|--------|--------|
| 1 だから   | 2 では   | 3 しかし | 4 あるいは | 5 なぜなら |
| 6 したがって | 7 たとえば | 8 つまり | 9 ただし  | 10 さらに |

問二 傍線部 a 「六〇代以上の人の子ども時代の貧困経験と今日の子どもの貧困経験」とあるが、(I) 六〇代以上の人の子ども時代の貧困経験、(II) 今日の子どもの貧困経験にはそれぞれどのような特徴があるか。次の1～4のうちから最も適当なものをそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。解答番号は 17 ・ 18。

(I)

- 1 戦後の経済発展に取り残された家庭が、貧困を人間的な成長の契機と捉え、似たような境遇の人たちと支え合っていた。
- 2 貧しく育ったことが一つのステータスになるほど貧困に寛容な社会だったため、働く意欲があれば生活できると考えられた。
- 3 戦後の厳しい貧しさを経験した世代が社会を支えており、貧困を苦にせずがんばれば豊かになれるという意欲を持っていた。
- 4 貧しい家庭が珍しくなかったため連帯感を持つことができ、社会全体が成長の途上にあり豊かになれるという希望が持てた。

(II)

- 1 近所づきあいが減り社会と切り離された状態に陥りやすいため、他の家族と比較する機会を得られず自らの貧しさに気づかない。
- 2 生活水準が高くなり貧困の質が変化したことに加え、貧しい家庭があることを社会が想定していないため、貧しさが表面化しづらい。
- 3 社会が成熟しきって経済的な成長に歯止めがかかってしまったため、貧困から脱却する方法が見通せず、問題を抱え込みやすい。
- 4 戦後の厳しい貧しさを経験していない世代のため、周囲から気づかれない程度の貧しさにも耐えることができず、意欲を失いやすい。

問三

傍線部 b・c・f・h・j と同じ漢字を含むものはどれか。次の 1～4 のうちから最も適当なものをそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。解答番号は 19 ㄱ 23 。

b 「コリツ」

- 1 彼はココウの作家だ。
- 2 社会の変化にコオウする。
- 3 コイに物を壊す。
- 4 元政治家のカイコロク。

c 「シヨコク」

- 1 シヨメイと捺印なういんをする。
- 2 財布をシヨジする。
- 3 シヨクンの健闘を祈る。
- 4 シヨグウが改善される。

f 「カ|タ|ミ」

- 1 カ|タ|ボウを担ぐ。
- 2 ロ|カ|タ|に停車する。
- 3 カ|タ|ガ|ミに沿って切る。
- 4 ア|ラ|カ|タの工事は終わった。

h 「リ|レ|キ」

- 1 完全にカ|ク|リする。
- 2 永久不変のシ|ン|リ。
- 3 多くのリ|ジ|ユンを得る。
- 4 契約をリ|コ|ウする。

j 「ニ|ユ|ウ|ヨ|ク」

- 1 ニ|ツ|コ|ウ|ヨ|クをする。
- 2 ド|ン|ヨ|クに学ぶ。
- 3 ヨ|ク|ヨ|ウをつける。
- 4 ヒ|ヨ|クな土地。

#### 問四

傍線部 d 「**相対的貧困**」という考え方は、どのような生活を基準として「**貧困**」を捉える考え方が。次の1〜4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 24。

- 1 その社会の中堅的な立場にある人々の生活
- 2 その社会において最も実現しやすいとされる生活
- 3 その社会における最低基準の生活
- 4 その社会で大多数の人々が望むであろう標準的な生活

問五 傍線部 e 「その立場ならではの苦しさ」とあるが、このような苦しきの例として正しいものはどれか。次の 1 ～ 4 のうちから最も

も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 25。

- 1 家計を助けるために働く必要がある、学びたいことがあるのに進学を諦めなければならない。
- 2 部活の仲間と同じように練習を重ねても、才能がなくレギュラーになれない。
- 3 ファッションが好きでもっと洋服が欲しいのに、必要な分はすでに持っているからと親に止められる。
- 4 持病によって食べられるものに制限があり、治療による経済的な負担も大きい。

問六 傍線部 g 「ケアを担っている子どもや若者は、同世代に比べて自分が「取り残されている」と感じやすい」とあるが、それはなぜか。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 26。

- 1 学校生活や人間関係に十分な時間と力を使うことができず、ケアと自分の生活の両立にストレスを抱えてしまうため、将来のために知識や経験を広げる意欲を失い、就職活動で不利な状況に陥りやすいから。
- 2 社会で想定されているように自分のために時間を使って勉強したり経験を積んだりすることができないため、社会的に評価される学歴や資格などを得られず、自分になにか能力を持っているという自覚に乏しいから。
- 3 社会に期待されている通りに自分の能力を磨いて経験を広げる子ども時代を送ることができないため、就職活動などの場面で自信のなさから自分は不利だと思ってしまう、本来持っている力量を発揮できないことが多いから。
- 4 ケアの役割を担う子どもは社会が想定していなかった存在で、自分のために時間や力を使わずに勉強や人づきあいの機会を十分に得られなかった子どもたちを適切に評価できる大人がいらないから。

問七 傍線部 i 「プラスの影響」とあるが、それはどのようなことか。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 27。

- 1 社会生活や仕事に活かせる知識や能力を持っていること。
- 2 ケアの仕事に必要な素養を身に付けていること。
- 3 同年代の人と比較して高い生活能力を持ち、仕事に必要な能力の大半も持っていること。
- 4 本来であれば仕事を通してしか得られない知識や能力を身に付けていること。

問八 傍線部k「親の介護から家事が分離されるという現象」とあるが、それはどのようなことか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 28。

- 1 結婚している息子介護者は、夫介護者やシングルの息子介護者と異なり、介護を理由に家事を行わなくても許されていたということ。
- 2 夫介護者やシングルの息子介護者は、結婚している息子介護者と異なり、介護を理由に家事を行わなくても許されていたということ。
- 3 結婚している息子介護者は、夫介護者やシングルの息子介護者と異なり、介護のうちの家事にあたる部分を負担していなかつたということ。
- 4 夫介護者やシングルの息子介護者は、結婚している息子介護者と異なり、介護のうちの家事にあたる部分を負担していなかつたということ。

問九

空欄 D

に入る語句はなにか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 29。

- 1 労働力
- 2 貧困児
- 3 介護者
- 4 未成年



問一〇 この文章の構成についての説明として正しいものはどれか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 30。

- 1 子どもの貧困とヤングケアラーの類似点を示した上で、貧困やケアの問題を抱える若者を減らすために必要な観点やサポートについて意見を述べている。
- 2 ヤングケアラーについて、子どもの貧困と比較しながら問題点や社会的背景などを丁寧に説明し、ケアの当事者である若者の意見を引用するなど実態をより正確に伝える工夫をしている。
- 3 関連する番組や調査の内容を引用しながらヤングケアラーを取り巻く現状について説明しているが、事実の説明にとどめており今後の展望には触れていない。
- 4 ヤングケアラーが抱える問題について子どもの貧困との類似点を示しながら説明し、家庭内での介護の実態をもとにヤングケアラーが生まれる背景にも言及している。

### 問題三

「私」の周囲には、兄である幸裕、その妻の遙子と娘の陶子、兄の愛人の順子などがある。ある日、兄の妻遙子が「それ」を見つけるために置き手紙をして家を出ていった。以下はそれに続く場面である。次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

子供の頃、兄が風邪をひくと母は大騒ぎをした。まるで不治の大病でもあるかのように心配し、つきつきりで手厚く看護する。母の簞笥のいちばん上の抽出には兄専用の小箱があつて、何種類もの薬がしまわれていた。銀色の小さな粒々や、うす茶色の漢方くさい丸薬、それにチヨコレートのようにとろりとした、甘い匂いの黒い塗り薬もあつて、母は、これをよく兄の白い胸にすりこんでいた。母の指がつかれたらといって、そのたびに兄がむずかつたのを憶えている。

そんなふうに臥せているとき、兄はあれが欲しいこれが欲しいと好きなことを言い、それらの望みはことごとく叶えられた。元来わがままな性質の兄は、風邪によつてそのわがままがすっかり助長され、病後などまるで暴君だつた。兄はおそろしく頻々と風邪をひく。たしかにからだは弱かつたのだ。

でも私は知っている。兄は病気を愉しんでいた。いつでも好きなときに、好きなように風邪をひいていた。

兄の寝顔をみているうちに、いつのまにか涼しくなつた。顔の上にできる半分の陰。エアコンのスイッチを切つて窓をあける。夏の夕方の匂いがある。

兄に限らず、私は眠っている人の顔をみているのが好きだ。眠つてるとき、人は動物より植物に似ている。しずかな寝息、しずかなまつ毛。ねむたあい、ことりたち。ねむたあい、さかなたち。ねむたあい、もりのけものたち――。

「おい」

うしろで、兄が怠そうな声をだす。

「あれ、買ってこいよ」

「あれ？」

私が訊き返しても、兄はこたえない。横になつたまま背中をまるめ、両手を脚のあいだにはさんでしまう。極彩色のブラウスを着た、やせっぽちの背中。

「豆腐屋のラッパ、きこえなかつたのか」

寝起きの声は色っぽい。私は、ベランダに漂う青白い空気に耳を澄ます。やわらかでかなしげな、とろとろとした夏の風。

「お豆腐屋さんのラップか？ いつの話？ そんなのいまどきないでしょう？」

兄はがばりと体を起こし、心外だというように私を見つめた。

「きこえなかったのか？」

「……………」

<sup>d</sup>兄は嘘つきだ。私はそれをよく知っている。でも兄の目はとても澄んでいて、兄が口にだしたことはすべて、私にはほんとうのことに思えてしまう。どんなこともみんな、兄がそれを口にしたら途端に真実になるのだ。足元で、朝顔の花はどれも——あの青い花もついに——固く花びらをまきこんでつぼんでいる。

「……そういえば」

私は財布をつかんで玄関をでた。スーパーマーケットにいったら、お豆腐の他にティーバッグも買ってこよう、と思う。ついでにスポンジとコカ・コーラも。

「おい」

兄は裸足<sup>はだし</sup>でとびだしてきて、ボウルを私にさしだした。

「<sup>(注)</sup>いれものがあるだろ」

<sup>e</sup>にやりと笑ってそう言った。

お豆腐を切つて氷水をはつた器に放し、兄と二人で冷や奴<sup>やっこ</sup>を食べる。ねぎとみょうがとはその葉を刻んで、しょうがをたくさんすりおろす。お豆腐は、兄に似ていると思う。色も、匂いも、触った感じも。私たちは他に何も食はず、何も飲まずに冷や奴だけを黙々と食べる。音のない部屋の中で。兄はものを食べるあいだじゅう、眉間にしわをよせている。あいた窓から、よそのうちのテレビの音がきこえる。

洗いものをすませると、六時半になっていた。

「幸裕、まだここにいる？」

濡<sup>ぬ</sup>れた手を二、三度振りながらふりむくと、兄は頬杖<sup>ほおづえ</sup>をついて栓抜きを玩<sup>もてあそ</sup>んでいた。(中略) 兄は私の顔をじつと見て、小さな声で、いや、とこたえる。いや、帰るよ。

「そう」

陶子が待ってるものね、と、言いかけてやめた。

「じゃあ駅まで一緒ね」

きょうは順子さんのお店の日だ。順子さんのお店は小さなバーだが、私はホステスさんじゃない（順子さんのお店には、かよちゃん注2と直子ちゃんという、きれいなホステスさんがちゃんという。三喜夫さんみきおという、古株のバーテンさん注3も、ちゃんという）。私は、そこで週に二日、専属の歌手をしているのだ。

途中多少の休憩はするが、だいたい十時から一時まで、ピアノの伴奏でたつぷり三時間の肉体労働、「ムーン・リバー」や「センチメンタル・ジャーニー」などのスタンダードを何曲か歌い（中略）、そのあとでリクエストに応える。演歌から小学唱歌まで何でも歌う、ということになっていて、知らない曲をリクエストされたら次までにおぼえてこなくてはいけない。常連客の中にはこぶしをきかせる歌ばかりリクエストする人や、スコットランド民謡ばかりリクエストする人などいて、ステージの雰囲気はそのときどきでがらりと違う。そのいきあたりばつたりな感じが私はわりと気に入っているのだが、それでも最後に歌う曲だけは決まっていて、全体の流れにも客の好みにも一切関係なく、順子さんの一存でそれは常に「バルレモアダムール」だ。

歌にはそこそこ自信がある。学校ではずっと合唱部にいたし、音楽の成績は筆記も実技もきわめてよかった。音域も二オクターブ近くある。正規の音楽教育は受けていないが、私の声は、なにしろ兄に、春の小川みたいだといわれたこともある声なのだ。（中略）兄と二人で夜道を歩く。夜道といっても、ようやく日が暮れたばかりの、さえざえとした夜だ。ヘルクレス座が、低い位置にうっすらと見え始めている。自分の息がねぎくさい、と言つて、兄は不機嫌な声をだす。

「きのうの夜、遙子何か言つてなかったか」

ゴムぞうりをひきずりながら兄が訊き、私には、兄の困惑gがたちまちつたわる。

「なんにも」

遙子さんの不在は、兄をこんなに不安にさせる。

「大丈夫よ。手紙にも、心配しないでつて書いてあつたでしょう」

どうして兄を放つてしまったんだろう、と思った。夜の中にぼっかりとうかんだ、白くて小さな遙子さんの顔。人魚の髪、華奢しやな指、はかなげで意志的な、それ自体矛盾した笑顔。ビールを飲みにきただけだから、と遙子さんは言った。ビールを飲みにきただけだから。

ふいに、誰かの視線を感じてふりむいた。片側が空き地になった住宅街の、アスファルトに電信柱の影がのびている。

「何だ？」

と言って兄もふりむく。なんでもない、とこたえて数歩あるくと、やはり背中に視線を感じた。立ちどまり、しばらくじつと息をためて、その気配をたしかめる。

「何してるんだ」

兄が再び不審そうな声をだし、私は、くるりとすばやく——ちょうどだるまさんがころんだをするときのように——ふり返ったが、まったく誰もいなかった。

「……先に行くぞ」

束の間きよとんとしたあとで、呆れたように兄は言い、そのままさつさと行ってしまった。

( 中 略 )

「おはよう」

いつものように、順子さんはこつてりと赤く塗った口元をほころばせて言った。この人の微笑は夜の匂いにする。

「きょうあたり、きつと守谷さんみえるわよ。西田佐知子、練習してきた？」

順子さんのお店の内装を、ひとことで説明するなら「湿気たり力ちゃんハウス」だと思う。オレンジ色の傘をかぶった電気スタンドや、暑苦しい織り物のソファ。ガラスのテーブルと、その下だけに敷かれた毛足のながいじゅうたん、まるい補助椅子。よく磨かれたガラス窓と、調律の狂ったランドピアノ。一等地にあるとはいえないが、固定客をすっかりつかんで繁盛していた。カウンターでは、かよちゃんと直子ちゃんが大人しく食事をしている。

「はい。しっかりと」

私は、課題曲だった「東京ブルース」の、しまいの部分を口ずさんでみせた。「暗い灯かげをさまよいながら、女が鳴らす口笛は、恋の終りの東京ブルース」。

事務所で着替えをしていると、またしても背中——さらにいえば腰のあたり——に、はりつくような視線を感じた。ふりむいても誰もいないが、ぞわぞわとひどく不穏な感じがする。

脱いだ服をロッカーにしまつと、下着姿のまま、私は椅子に腰かけて考えた。誰もいない部屋の中で視線を感じる、ということについて、ミケランジェロの彫像、ロレンツォ・デ・メディチみたいなポーズで。

窓をあけると駐車場で、砂利の隙間にぺんぺん草が顔をだしている。私は窓辺に立ち、そのまま外の空気にあたった。ヘルクレス座はだいぶ高い位置にのぼり、月も中空に青白くひっかかっている。私は急に、遠吠えがしてみたくなる。オオカミみたいに。コヨーテ

みたいに。

窓を閉めて衣装を着る。私の衣装は、シーズンごとに何枚か順子さんが選ぶのだが、順子さんは、非凡なまでの高貴と俗っぽさとのあわいをぬうような、なんというか、風変わりなセンスをしている。着る者の趣味などはじめから考慮しない人なので、結果として私は華麗で浮世ばなれした、シフォンやジョーゼットやタフタでできたぴらぴらしたドレス——りぼんがついていることもまあある——を着ることになる。そして、自分でいうのもなんだが、私にはそういうドレスが、ほとほといやになるくらい奇妙に似合ってしまうのだ。昔、家庭用のアップライト・ピアノの上や、カップボードの中に飾られていた、布製の変てこなフランス人形そっくりになる。

順調な夜だった。

客は順調にやってきて順調にボトルをあけ、かよちゃんと直子ちゃんは客の相好(注5) どうちうを順調に崩させたし、三喜夫さん特製のなすの浅漬けの、漬かり具合も順調だった。案の定、ひさしぶりに守谷さんがやってきて、私は順調に「東京ブルース」を歌った。

( 中 略 )

守谷さんは感激してアンコールをし、上等のブランデーをごちそうしてくれた上、御褒美に五千円札を一枚くれた。上手、と、順子さんがほめてくれる。そして、私はその順調な夜のあいだずっと、誰かに見つめられている気がしていた。なんとなく、不愉快な視線ではないと思った。

(江國香織『なつのひかり』による)

- (注)
- 1 いれもの……豆腐屋が移動販売をする場合、容器に入っていない状態の豆腐を売っていることがあるので、いれものを持つていく必要がある。
  - 2 ホステス……バーで接客をする女性。
  - 3 バーテン……バーで酒などの調合をする人。
  - 4 西田佐知子……一九六〇年代に活躍した元歌手(一九三九)。「アカシアの雨がやむとき」「コーヒールンバ」などがヒットした。
  - 5 相好を順調に崩させた……順調に喜ばせた。

問一 傍線部 a・f の語句の意味はどれか。次の 1～4 のうちから最も適当なものをそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。解答番号

は 31・32。

a 「ことごとく」

1 すべて

2 おおよそ

3 まれに

4 一つだけ

f 「一存で」

1 その場の思いつきで

2 気の利いた心遣いで

3 一生の願いで

4 一人だけの考えで

問二 傍線部 b 「まるで暴君だった」とあるが、兄のどのような様子を表しているか。次の 1～4 のうちから最も適当なものを一つ選

びマークしなさい。解答番号は 33。

1 欲しいものを手に入れるためには手段を選ばず、母の意思など一切無視してわがままを押しつけていた様子。

2 病気をうまく利用して自分の望みが叶うように仕向けており、わがままな上にずる賢さも兼ね備えていた様子。

3 もとのわがままな性質に加え、甘やかしてもらえるのをいいことに、より一層わがままに拍車がかかっていた様子。

4 病気であることを理由に、言いたいことを言いやりたい放題だった上、暴力的なふるまいをするようになっていた様子。

問三 傍線部 c 「兄は病気を愉しんでいた」とあるが、それはどのようなことか。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものを一つ選び

マークしなさい。解答番号は 34。

- 1 ときには仮病も使って、病気になったときの自分にとって都合のいい状態を満喫していた。
- 2 病気になると普段使わない特別な薬を使ってもらえるため、病気になることを心待ちにしていた。
- 3 つらい現実から逃避するために、病気と偽って自分の世界に閉じこもることを繰り返していた。
- 4 病気になって周りの人にちやほやされることに味を占め、病状を自在に操れるようになっていた。

問四 傍線部 d 「兄は嘘つきだ」とあるが、このとき「私」はどのようなことを考えているか。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものを

一つ選びマークしなさい。解答番号は 35。

- 1 絶対に豆腐屋のラップはきこえていないのに、きこえたと信じて疑わない兄を厄介だと思っている。
- 2 兄にはきこえていた豆腐屋のラップがきこえなかったと認めたくなく、兄の嘘だと思い込もうとしている。
- 3 本当は豆腐屋のラップなどきこえておらず、豆腐を買いに行かせるための兄の作り話だと勘づいている。
- 4 豆腐屋のラップがきこえたというのは兄の嘘だと気づき、すぐに嘘をつく兄を心配している。

問五 傍線部 e 「にやりと笑ってそう言った」とあるが、このとき「兄」はどのような心情か。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものを

一つ選びマークしなさい。解答番号は 36。

- 1 「私」が豆腐屋に行くのにいれものを持って行かないのであればかにしている。
- 2 「私」がいれものを忘れていると気づいたことで得意げになっている。
- 3 「私」がスーパーに豆腐を買いに行くとわかっていながらからかっている。
- 4 「私」が豆腐屋でなくスーパーで豆腐を買ってくるのではないかと疑っている。



問六 傍線部 g 「兄の困惑」とあるが、兄はどのようなことに「困惑」しているか。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものを一つ選び

マークしなさい。解答番号は 37。

- 1 妻が理由もはつきりさせずに家を出て行ってしまったこと。
- 2 妻が家を出た理由を「私」がかたくなに教えてくれないこと。
- 3 妻が家にいないことが初めてでどうしたらいいかわからないこと。
- 4 感情の起伏が激しい妻にたびたび振り回されること。

問七 傍線部 h 「どうして兄を放っていつてしまったんだろう」とあるが、このとき「私」はどのような心情か。次の 1 ～ 4 のうちか

ら最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 38。

- 1 きこの夜の夜に会ったときも変わった素振りを見せなかったの、遙子さんがどうして家を出ていったかが本当にわからず、純粋に疑問に思っている。
- 2 遙子さんが家を出ていった理由はまったくわからないが、きこの夜の夜遙子さんが言い残したことがなにかヒントになるかもしれないと思い、考えを巡らせている。
- 3 自分の知っている遙子さんは兄を残して家を出るような人には思えないのに、突然姿を消してしまったので、遙子さんのことをなにもわかっていなかったと落ち込んでいる。
- 4 前々から遙子さんのことをつかみどころのない人だと思っていた上に、突然姿を消して兄のことをひどく困らせているので、遙子さんに対して怒っている。

問八

授業でこの文章を読んだ後、次のような話し合いをした。

I

II

に入る発言はどれか。あとの1～4のうちから最も適当なものをそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

解答番号は

39

・

40

。

生徒A——どこか不思議な雰囲気のある物語だったね。

生徒B——「ねむたあい、ことりたち。ねむたあい、さかなたち。ねむたあい、もりのけものたち——」。のところが、特に不思議。

生徒C——「私」が突然何者かの「視線」を感じるようになるところも、どこか現実離れた印象を受けるよね。

生徒A——「視線」については、I と思うな。

生徒C——へえ、たしかにそのように考えることができそうだね。おもしろいな。

生徒B——不思議な雰囲気がある一方で、どこか現実がありそうな話だとも感じない？

生徒C——そうだね。II からかな。

生徒A——不思議な一面と現実的な一面が共存しているところが特徴だよな。

(I)

1 「遙子さん」の話をしたときから「視線」を感じるようになってから、「遙子さん」が本当は側そばにいることを表現している

2 「視線」を感じるようになった後の「順調な夜」が印象づけられているから、その後起きる不幸を暗示している

3 どのようなものか明確に語られる部分はないけれど、「視線」についての描写が登場する場面から、「私」の本心を表している

4 その正体が明かされないままだから、謎の「視線」を使うことで不思議な雰囲気を演出している

(II)

1 部屋にあるものや曲についての描写が具体的で、登場人物の個性も鮮やかに描かれている

2 登場人物の会話を中心に物語が展開していて、どの人物の感情も読者に伝わりやすく描かれている

3 象徴的な場面が途切れ途切れに描かれていて、読んでいる人が物語に引き込まれやすい

4 人物や物についての描写が細かくて、時間の流れに沿って丁寧に進んでいくから物語の展開を追いやすい